

観測に適し



江戸川大
名誉教授 土器屋由紀子さん

どきや・ゆきこ 江戸川大学名誉教授。2004年に無人化された富士山測候所の有効活用に向け、「NPO法人富士山測候所を活用する会」の立ち上げに参加、同会理事を務め、広い分野の研究や教育のサポートを目指している。1939年生まれ。

富士山測候所を借りて二〇〇七年から大気汚染などの調査を行っている。なぜ富士山にこだわるかというと、富士山が独立峰で、山頂は、地面の熱や摩擦、人の活動による汚染大気がたまる大気境界層(千メートル)の上の自由対流圏高度にあり、地表の影響を受けにくく、また偏西風が強くと酸化硫黄や水銀、粒子状物質(PM)2.5などの大気汚染物質が大陸から運ばれてくるので、これらの観測に適しているからです。富士山頂の高さに飛行機で上がり観測すると、経費もかかります。

富士山頂では気象学だけでなく、化学分析、二酸化炭素の観測、雨の化学分析など大気化学、永久凍土とコケの関係を使った温暖化の調査、天文学の研究まで行っている。富士山測候所を借りての研

究は反響も大きく今年も十六のプロジェクト、五百人が観測、研究を行います。広い範囲の研究を受け入れることで、異なる分野の連携ができ、新しいチャレンジができ

測候所で異分野連携

が上昇、火山の影響による大気汚染が分かりました。また同年夏、落雷時に起る珍しい高高度発光現象の一つとされる「スプライト」の写真撮影に成功しています。

同時に、測候所は四千級級の監視タワー。東日本大震災での福島第一原発の事故での放射性セシウムを含んだ汚染空気の固まりは、山頂では検出されなかったが、千五百級の登山道では検出された。観測データをつなぎ合わせると二千五百級以下のところを通ったのではないかとということが分かりました。

今後は測候所の教育への活用にも力を入れていきたい。

本栖湖そばの竜ヶ岳から見た昇るダイヤモンド富士
▲ 田代博さん提供